

平成28年度漢字指導改善研究のまとめ

1 目標

◎すべての子どもたちが無理なく漢字を習得していくための合理的な指導法を研究開発する。

2 研究の仮説

①上学年の漢字もルビ付き表記で表示していくことは、子どもたちの学びに有効なのではないか。

- ・例えば、「はつ明」と部分表記するのと「発明^{はつ}」とルビ付きで本来の漢字表記にするのとでは、読みの難易度という点では全く変わらない。単語の意味把握という点では、むしろ優れているのではないか。
- ・上学年の漢字も低学年から目に触れさせていくことで、漢字の「読み」「形」「意味」を無理なく学べていくのではないか。

②「読み書き同時進行」より「漢字の読み優先」の学習の方が学びやすいのではないか

- ・「読むこと」は「書くこと」に比べて負荷が少ない。漢字学習が苦手な子も取り組みやすいのではないか。
- ・「読むこと」を優先させることにより、漢字の形や意味理解が進む。その上で書く練習に入る方が合理的なのではないか。また、書いて覚える練習の負荷も軽減されるのではないか。

③漢字を読む力が育つことによって、文章を読む力・情報収集力が育つのではないか。

- ・漢字に読み慣れることで、活字本を抵抗なく読もうとする意欲が育つのではないか。
- ・新聞、各種資料からの情報収集力が高まるのではないか。

3 研究の方法

(1) 「漢字音読名人」を活用した取組

(3年生の「漢字音読名人」の例)

④	③	②	①	6
葉	酒	湯	苦	【確かめてみよう】 合格
草の葉にバツが止まっている。 葉が茶色くなると落葉する。 もみじが赤く紅葉する。	飲酒運転は禁止です。 あま酒は子どもでも飲めません。	酒屋さんでお酒を買う。 ポットの湯でお茶を入れる。 熱湯がかかって大やけどする。 温泉のお湯につかる。	苦い薬を飲む。 マラソンはとても苦しい。 苦勞して、やっと宿題ができた。	【読んでみよう】

漢字ルビ打ちの文を音読し、読めるようになった漢字のルビを塗りつぶす。全部読めたら合格。次に進む。」というやり方で進める漢字音読練習ドリル。上学年の漢字もルビ付きで表記している。国語の時間や朝自習などの時間に短時間、継続的に取り組むことを想定して作成している。

(2) 特別な支援が必要な児童への漢字指導

読み書き障害のある子どもにとっては、表音記号のひらがなより、表意性のある漢字が理解しやすいのではないかと。漢字の読みに焦点を当てて、文字の習得や文を読む力を高めることの可能性を探る。

(3) 創意工夫による取組

漢字学習を苦手とする子どもたちは少なくない。そういう子どもたちも楽しく主体的に取り組めるような漢字指導の工夫を各校の創意工夫によって実践する。

4 研究協力校および研究協力者

□研究協力校

玉緒小学校 湖東第三小学校 八日市西小学校 八日市南小学校 能登川西小学校
能登川北小学校 八日市南小通級指導教室 蒲生北小通級指導教室

□オブザーバー

杉澤 周一氏 (八日市西小学校長)
井上 知子氏 (本市ユニバーサル教育講師)

5 研究経過

○研究期間:平成28年9月～平成29年2月末

○実践交流会

- ・中間交流会 11月 4日(金)開催
- ・2学期末交流会 12月26日(月)開催
- ・3学期末交流会 3月 3日(金)開催

6 実践研究① 「漢字音読名人」の取組

(1) 各校の取組状況

学校名	学年	活用時間帯	活用方法
A小	2年	・掃除終了後の5分間 と、帰りの会の準備 ができた後	・合格欄を三分割し、友だち3人に聞いてもらい合格のサインをもらったなら、先生に聞いてもらう。合格したらシールを貼る。
B小	2年	・国語の学習時間 ・朝スキルタイム	・担任が聞いて評価。
C小	4年	1学期 ・休み時間	・全プリントを綴じたものを使う。 ・1週間ごとに範囲を決めて、取り組ませる。

		3学期	・朝学習の課題の後、中休み、給食の準備が終わってから	・印刷したものを1カ所においておき、合格したら次のプリントを取って各自ファイリングしていく。
D小	3年		・宿題と朝自習	・宿題で覚えてくるようにして、朝自習で確認する。
E小	3年		・朝自習	・朝の活動に組み込んでやっていたが時間が取れないので、後半家庭学習の課題として取り組ませた。
	4年		・国語の時間の3分	・昼休み時間に担任のところへ来て評価。 ※3. 4年とも、3学期は時間の確保が難しく継続的に取り組むことができなかった。
F小	4年		・朝のドリルタイム(火)(木)2回 15分 ・国語入り授業の最初や最後に。宿題でも。	・担任が聞いて評価。 後半は、教師のチェックは外し、友達2人に聞いてもらってOKなら合格という形にした。

(2) 取組結果の分析

①「漢字が読める」ことと学習意欲の相関性

中間交流会において、各校から報告された「漢字音読名人」の取組結果は下記のとおりである。

	前より好き になった	前より嫌い になった	変わって いない
A小2年	10	1	3
B小2年	52	5	16
C小3年	17	3	25
D小3年	26	0	12
E小4年	8	1	6
F小4年	19	3	6
合計	132	13	68

「前より好きになった」と答えた子が全体では60%を超え、「前より嫌いになった」と答えた子はごくわずかである。

また、「前より好きになった」理由として、次のように書いている。

□「前より好きになった」理由

- ・前は漢字をぜんぜん読めなかったけど読めるようになった。自信がついたから。
- ・ふりがながついていいるから漢字音読がすきになった。
- ・書くのと読むのはちがう。
- ・とてもたのしかった。どんどん楽しくなっていくから。

- ・かん字音読名人をしたら、すごくまい日ならいたくなってすごくへんかしました。
- ・おとなになったきぶんがして好き。
- ・おもしろいよみがながいっぱいできてきたから好き。
- ・漢字がどんどんなれてきたから。いろいろ漢字を見て勉強したから。練習したから。
- ・ならっていないよみかたもよめるようになったから
- ・だんだんむずかしくなってきたから。むずかしいけど好きになれたから。
- ・前はひらがなで書いた方がかんたんだからひらがなでかいてたけど、音読名人をやったから、かん字でかくようになったから。etc

漢字を読む練習は書く練習に比べて簡単であること、どんどん進級できていく快感があることなどが、子どもたちの学習意欲の高まりにつながっていると言える。

また、上学年の漢字をルビ付きで表記していることについても抵抗感無く、むしろ知的好奇心をかきたてられているようである。

2学期末交流会では、漢字音読名人の活用の仕方を工夫することで、子どもたちの学習意欲がさらに向上したという報告を受けた。

◎子どもたちと相談して目標設定

子どもたちと相談し、2学期の終わりまでの到達目標を設定したことで、子どもたちの意欲に火がついた。最初、掃除が終わった後の5分間に取り組んでいたが、子どもたちの意欲が高まり、帰りの会で早く準備ができた子がチェックを受けに来るようになった。休み時間も「聞いて！」と付いて来るほどになった。全部終わらせて、「早く次のがやりたい」「3学期の漢字も今のうちにやったら楽になる。」と言う子も出てきている。

(A小2年)

◎「漢字音読名人」プリントのファイリング化

個々の子どもたちが自分の進度に合わせて自由に取り出せるようにファイリングして教室に置いた。その結果、自分たちで自主的に次のプリントを取り出し、取り組んでいく姿が見られるようになった。

(A小2年)

台紙にプリントを順に綴じていくようにした。枚数がたまっていくので、子どもたちも進んでいることを実感できた。また、シールを貼る欄があるので、合格したらシールを貼っていくというふうにした。喜んで取り組んでくれた。

(B小2年)

◎取組のパターン化

「授業の最初の3分間、漢字音読名人に取り組む」ということに決めて取り組んだ。挨拶が終わったらこれ、とパターン化され意識付いているのですんなり入れていた。短時間なのでやる気をそぐことなくやれた。

(F小4年)

2学期の間ずっと取り組むことで、ペースが分かってきて、自分から積極的に取り組んだ。何度も繰り返すことで読めるようになってきた。

(B小2年)

◎家庭学習として取り組む

朝の活動に組み込んでやっていたが時間が取れないので、家庭学習の課題として取り組ませた。「早く進めたい」「もっとやりたい」という欲求に応える形になり、次へ次へと意

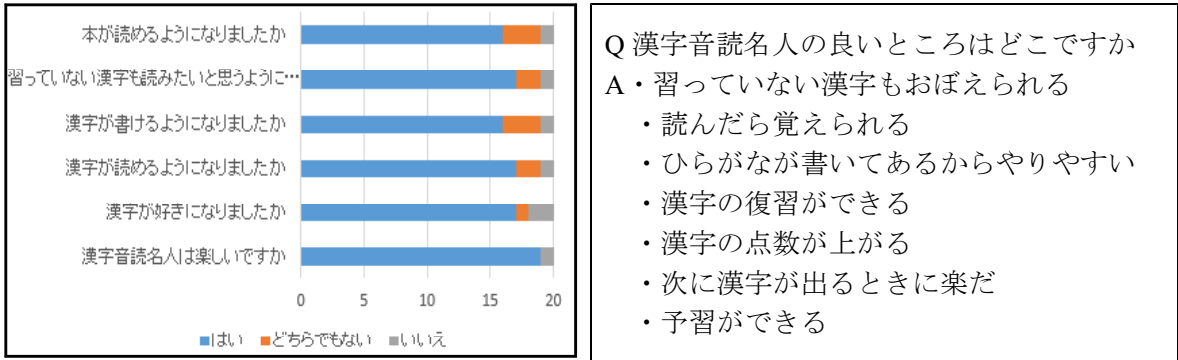
欲的に進める子どもたちの姿が見られた。 (E小3年)

日々の学校生活や家庭学習の一コマに位置づけ、子ども自身の主体性を生かす形で取り組むことにより、一層学習意欲が高まったということである。

漢字の音読に特化した学習は、学力的な課題がある子どもたちにとっても有効であったという報告もあった。

- ◎低位・外国籍の子も意欲的に取り組めた
- ・読むだけなので、ハードルが高くなって取り組みやすい。低学力の子どもたちも一生懸命取り組んでいる。外国籍の子どもにとっても、書けなくても読めればOKなので取り組みやすかった。 (B小2年)
 - ・就学相談にかかるレベルにあった子も漢字音読名人は意欲的に取り組めた。(A小2年)
 - ・読みに課題のある児童が、漢字音読名人とルビ付き分かち書き教科書の併用で漢字の熟語が読めるようになってきた。学習の場面で、みんなと同じ教科書で読めるようになってきた。また、読みの得意な児童は、一度見ただけですらすら読めてしまう。自分の得意さ、強みを自覚できた。 (B小通級指導教室)

3学期末交流会で、A小から取組全体を振り返っての子どもアンケートの結果の報告があった。



こうした各校の実践結果から、「漢字音読名人」は全体として子どもたちの学習意欲を確実に高めていると言ってよいのではないかと。とりわけ、漢字の学習に困り感を持っていた子どもたちの学ぶ意欲を引き出すことに有効であったと言えるのではないだろうか。

②「読む力」の客観的な評価

子どもたちの学習意欲の高まりは顕著に見られたが、確かな学力として定着していると言えるのだろうか。

この点について、中間交流会で次のような報告があった。

□漢字音読名人の例文から抽出した「漢字の読みチェックプリント」を作成し、9月初めと10月末、同じ問題で実施し漢字を読む力の変容を調べた。

校名	チェックプリント結果	分析
F小(4年)	(9月)学級平均 62.2点 ↓ (10月)学級平均 80.5点	<ul style="list-style-type: none"> ・学級全員点数が上がった。最高38点増 ・1回目50～60点台の中間層のアップ率が高く、取組も積極的であった。 ・1回目10点台(2名)は2回目20点台にとどまり、取組も消極的だった。
A・B小(2年)	(9月)全体平均 18点/40点 ↓ (10月)全体平均 27点/40点	<ul style="list-style-type: none"> ・1回目より点数が下がった児童が3名いた以外は全員点数が上がった。

また、2学期末交流会では、次のような報告を受けた。

○ 漢字を書く力が高まった

- ・漢字音読名人の取組との関係は不明だが、子どもたちの漢字を書く力は高まった。(A小2年)
- ・漢字の読み練習との関連は不明だが、学期末の50問テストの成績が1学期より上がっている。(D小3年)

○漢字を使うようになった

- ・毎日の日記や行事の作文を書くときに音読名人に出てきた漢字を使っている。(B小2年)

○子どもたちの語彙が増えた

- ・漢字を読むというより、例文を暗唱しているという形になっているが、それを使えるようになってきている。(A小2年)
- ・言葉数が増えたように感じる。(B小2年)
- ・短文だが、その内容や表現が文学的であり、優れた表現のものが多く、子どもたちの表現力を高めたり、語彙を豊かにしたりすることにも有効であった。(E小3年)

3学期末交流会では、2～3学期半年間の子どもたちの漢字習得力の変化について次のような報告があった。

[B小2年]

音読チェックプリント(50問)平均正答数

	8月30日	11月上旬	2月下旬
2-1	16.3	27.0	30.9
2-3	20.8	26.9	34.5

年間5回分の漢字25問テスト平均正答数

	4.5月	まとめ	9.10月	まとめ	2年まとめ
2-1	93	97	96	93	97
2-2	89	89	85	88	92
2-3	90	94	98	93	97

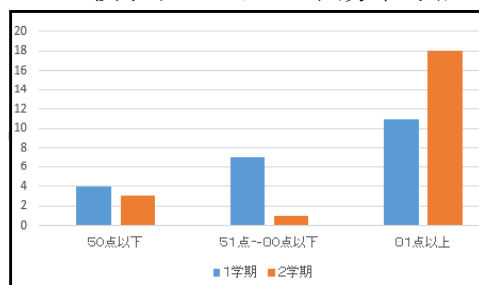
※数値からは見えにくいですが、低位の子どもの正答数は上がってきている。(担任評)

外国籍児童等、学びに困り感のある児童の場合

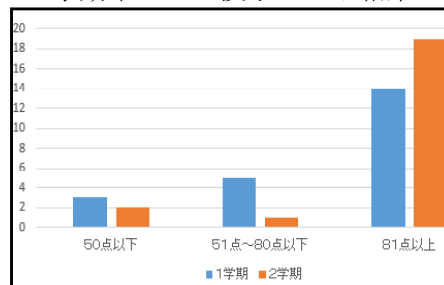
□漢字25問テスト結果(取組前→3学期末)			
A子(外国籍)	12→80	K子(外国籍)	46→92
A男(外国籍)	20→68	Y子(外国籍)	76→88
Y男(低学力)	74→96	N男(低学力)	64→88

[D小 3年]

漢字小テスト14回分平均点



学期末まとめ漢字テスト結果



これらのデータから、漢字学習に対する意欲の高まりが漢字習得の定着に確かに繋がっていると言えるのではないだろうか。

③「漢字が読める」ことの波及効果

漢字が読めるようになることで、子どもたちの姿に好ましい変化が見られるようになったという報告もあった。

○漢字音読名人に取り組むようになってから、図書室へ行く頻度が増えて、楽しみながら分厚い本を読む子が増えた。(D小3年)

○子どもの生活の中に「読む」活動が増えたことで、読むことへの抵抗が少なくなってきた。総合的な学習や社会科の学習で図書室へ調べに行っても、今までは難しい文章だとすぐあきらめていたのが、じっくり文章と向き合う子どもの姿が多く見られた。文脈の中で意味を考えたり捉えたりしようとする子も見られるようになってきた。(E小3年)

○[通級指導教室に通う児童]

- ・教室で音読する際、つまらずに読めるようになってきた。
- ・文章が読めるようになり、テストの理解力の得点が上がった。
- ・学習のまとめに自分の言葉で考えを書けるようになった。
- ・授業中、教師の話のメモを取るようになった。
- ・友達の輪が広がった。女の子にも話しかけるようになった。

漢字が読めることで文章を読む力や情報収集力が高まるのではないかと、という仮説を裏付けるエピソードである。また、自己肯定感の高まりが対人関係にも好影響を与えているということにも注目したい。

④ 「漢字音読名人」の限界

全体的には、「漢字音読名人」の取組によって学習意欲が向上し、確かな学力としても定着する方向に向かっている。しかし、「漢字音読名人」の学習に意欲を示さなかった子どもたちも少数だが存在する。

中間交流会で報告されたアンケート結果で、「漢字音読名人」の取組によって前より嫌いになったという子どもたちは、次のように答えている。

■ 「前より嫌いになった」理由

- ・おぼえるのがきらい。
- ・1年のときはかんたんだったけど、2年からむずかしくなったから。
- ・前のほうがかんたんだから。
- ・前は好きだったけど漢字音読名人をやったらちょっときらいになった。
- ・べんきょうがきらいだから

また、上記のようにF小4年からは次のような報告もあった。

チェックプリントテストが、1回目10点台(2名)は2回目20点台にとどまり、取組も消極的だった。

全体的には有効であった「漢字音読名人」も、学力に重い課題がある子どもたちには意欲を喚起するものにはなり得なかった。そのことを真摯に受け止めなければならない。何が不足していたのか、交流会の話合いで浮かび上がってきたのは次の2点であった。

●漢字の意味理解の過程が抜けていること

「漢字音読名人」は、漢字の意味理解の過程を経ずに音読できることだけを求めている。しかし、意味理解なしには読めるようにならない。「『遊牧民族』という言葉は、多くの子が何度練習しても読めるようにならなかった。」という報告など、そのことを端的に示している。

一定の語彙を獲得している子どもたちには、例文からその意味を類推していけるが、語彙力の弱い子どもにとっては、意味も分からずただ音声化するだけの学習になってしまっていたのだろう。それは苦痛以外の何物でもない。

●単調さ

最初のうちは興味を示していても、単調な練習には飽きが出る。同じことの繰り返しは、誰にとっても楽しいものではない。まして学習習慣の確立していない子どもたちには耐えられないことであったのだろう。

「漢字の意味理解」と「単調」。この2つが、克服すべき大きな課題であることが実践を進めていく中で見えてきた。

(3) 「漢字音読名人」の取組をより有効なものにするポイント

2～3学期の各校の実践から、「漢字音読名人」を有効なものにするポイントを次のように整理してみた。

①取組の時間帯を固定して取り組むことが有効

・このプログラムは単調であるが、パターン化しやすく、一度やり方を覚えるとスムーズに取り組むことができる。「この時間にする」と決めていたので毎日自然に取り組むことができた。(A小)

単調さは、見方を変えれば習慣化させやすいというメリットにもなる。そして習慣化のためには年間おとして取組時間帯を固定化することが重要である。その設定がきちんとできたところほど成果も大きい。

②冊子に綴じる形より、合格するごとに次のプリントを取っていく形が有効

・1学期は、全てをホッチキスで留めて渡した。漢字が得意な子、興味を持った子は積極的に参加していたが、苦手と感じている子は自分から進めるのは難しかった。
3学期は、印刷したものを1カ所に置いておき、合格したら自分で取ってファイリングしていく方法に変えたところ、子どもたちの意欲は格段に高まった。(C小)

この方法の良さは、「自分の意志で取り組む」「努力した結果が目で実感できる」ということである。

③子ども同士の相互評価による進級も有効

・特に、子どもたち同士の確認時には、たくさんの友達にできた印をもらうため、生き生きした姿が見られた。(D小)
・後半、教師のチェックから友達二人のチェックで合格、という形に変えたが、やる気はなくなることもなく、継続して取り組めた。(F小)

子ども同士の関係で学習を進めることが、主体性を大いに引き出すものになっている。また、子どもの手に委ねることで、教師側の負担も軽減できる。

④漢字の意味理解は市販の漢字ドリルを活用

「漢字音読名人」のみの取組では漢字の意味理解の部分が抜け落ちるという課題について、オズバーガー井上氏から次のような助言があった。

「漢字音読名人」で読み先行学習を進め、漢字ドリルで一つひとつの漢字の意味を押さえる場をきちんと取れば、かなり補完されるのではないかと。

漢字ドリルには漢字の成り立ちや意味が付記されている。しかし、それを積極的に活用していないのが現状ではないか。「漢字音読名人」と漢字ドリルを併用するというやり方はとても有効だと思われる。

7 実践研究② 特別な支援を必要とする子への漢字指導

(1) F小通級指導教室における実践(S教諭)

□指導児童 5年男児

□指導期間 H28.10～H29.2 月～金 12:20～12:40

□指導内容 漢字ドリルを使った学習

①まず読みを覚える

②意味を調べる

③漢字と意味がイメージできるようあれこれ話す

※漢字の意味を調べることで熟語や文の意味が分かる

(例)『大造じいさんは会心のえみをもらいました。』……「何の実をこぼしたん？」

④書いてみる

⑤覚えにくいものは、さらに意味を付け足し覚えやすくする

(例) 寺院……寺(じ)は東大寺の寺(じ)

院は病院の院、建物っていう意味もあるんやで

⑥形の覚えにくいものは唱え書きをする。

(例) 輪……「1月にリスのせる」

□取組の成果

【担任の感想】

- ・漢字テストの得点が伸びた。
- ・教室で音読する際、つかえなくなってきた。
- ・文章が読めるようになり、テストの理解力の得点が上がった。
- ・学習のまとめに自分の言葉で考えを書けるようになった。
- ・授業中、教師の話のメモを取るようになった。
- ・友達の輪が広がった。女の子にも話しかけるようになった。

【本人の感想】

- ・毎日続けた漢字の勉強は、5段階評価の5「とても良かった」
その理由は、「前は漢字テストで100点を取れなかったけど、10月に勉強始めて100点を取ることが多くなったから。」
- ・漢字を覚えるコツは「意味が分かることと、しっかり漢字が読めること」
- ・漢字の読み書きができるようになって「算数の分数ができるようになってきた。」

(2) B小通級指導教室における実践(F教諭)

～読み書きに課題があり、漢字の学習に困難を示していた児童への実践事例～

①目標を児童自らが決める

「漢字をもっと書きたい、覚えたい。」この目標を本人が立てた。

本人の意思に沿いながら、「どうすれば漢字を覚えることができるか」を見つけていくことを学習内容の中心に定めた。

②対話の中で、自分の思いが語れる

毎時間話す時間を取った。よく話したが、一方的な会話にならないよう、聞く・話すの使い

分けを意識した。

③得意なことや好きなこと、強い特性を生かす

聴覚短期記憶やワーキングメモリーは低い、視覚情報の取り込みや視覚記憶は比較的強い児童。

教材「漢字の扉」(扉を開けて見えた部分から漢字を類推する)がきっかけとなり、漢字に興味を持つようになった。

また、タブレットのアプリ「漢字筆順辞典」も漢字への興味を深めた。

アプリ「Bitsboard」(漢字の読みを定着するソフト)を遊び感覚で楽しんでいるうちに読みを覚えてしまった。強みである視覚情報を有効活用することが漢字に対しての興味関心を引き起こすことにつながった。

④ルビ付き教科書

国語の教科書一冊分をルビ付きにし、分ち書きで読みやすくした本を渡し、一年間、教室でも家でも使用した。読めると意味も分かるので、読解もでき学習がはかどったようである。

⑤「漢字音読名人」

「漢字音読名人」も取り入れ、「漢字の読みを目で見て覚えて読めるようにする、」という方法を取ることで漢字に対しての抵抗感が減っていった。たくさん読んで親しみ、分かることを重視した。

⑥自分の学習法を見つける

いろんな記憶術を試し、その子が自分に合っていると気づいたのが「見て覚える→繰り返し」記憶術だった。以後、漢字テストになると、自分でまず書いてみて、間違えた字だけ、正しい答えをよく見て何度も書くと覚えられることを発見した。今ではそのやり方を使って学習に取り組むことができるようになった。

□児童の変容

	通級開始前(4月)	通級終了時(2月末)
読み	<ul style="list-style-type: none">教科書を読むことが難しく、区切りが分からずに長い文章が読めない。音読は苦手なので途中でやめてしまう。漢字も読めないため、読み仮名をつけないと読めない。	<ul style="list-style-type: none">読み仮名付きの小説や漫画などを好んで読むようになった。休み時間も図書室へ行くことが多くなり、教室で本を読むことが増えた。本に興味を持っている。初めての文章でも、漢字の読みを調べながら読むことができる。
書き	<ul style="list-style-type: none">カタカナは読めるが書けない。漢字も書けないため、漢字テストも点がほとんど取れない。100点満点中10点程度。	<ul style="list-style-type: none">文章にカタカナ・漢字を入れて書けるようになった。漢字テストも得点が取れるようになり、80～100点取れるようになった。
読解	<ul style="list-style-type: none">読めないため、文章の内容理解は難	<ul style="list-style-type: none">読んだ小説の内容が話せる。

	しい。	
話す	・会話が一方的になりやすく、話したいことだけ話し手、相手の話が聞けない。	・会話のやりとりができるようになった。 ・友達とも話せるようになったり、家で学校のできごとを話したりするようになった。

8 実践研究③ 創意工夫による取組

(1) 漢字ドリルを使った読み先行指導

- ①漢字ドリルの読みのページで「読み」を学習する
- ②新出漢字の学習で書き・言葉を学習する。
- ③教科書の学習をする。(漢字ドリル「読み」のページで学習した文章が出ている)

という流れで学習を進めた。先に「読み」を学習しているので、教科書の文章にスムーズに入ることができ、音読についてはあまり苦労しなかった。新出漢字の読みの指導が不要になった分、担任としても楽になった。(B小2年)

(2) 漢字ビンゴの取組

楽しく取り組めて、漢字への抵抗を無くすことをねらってやった。
 5×5マスに2学期に習った漢字から選んで書く。漢字のくじ引き札を作っておき、それを子どもが引いて発表する。「漢字の『漢』。」というふうに言わせる。分からなければ引いた子に「違う言い方して。」と尋ねさせる。話すことが苦手な子が多いクラスだが、「これ、何て言ったらいい？」と周りの子に尋ねながら発表できていた。
 楽しんでできる活動だったので、自習の時間にも子どもたちが自主的にやっていた。(C小4年)

(3) 子どもたちが作る漢字ドリル

自分たちで漢字を使った文を作り、それをプリントした自作の漢字ドリルを作った。4人班で、1人2～3個ずつ、10問作る。漢字は、漢字ビンゴで使っている漢字のくじ札を引いて選んだ。「文が思い浮かばなければ、ドリルを見てもいいよ。」と言ったが、けっこう自分たちで考えて作っていた。できあがったものを増し刷りして、宿題にした。「漢字ドリルの宿題は嫌いだ。」と言っていた子どもたちが、「次、何班?」「こんどは俺らの班や。」と言ったりして意欲が高まってきた。(C小4年)

子どもたちが考えた文を使って、漢字ドリルを作った。『2の1ドリル』と名前を付けて綴じた。それを日々の学習に取り入れた。子どもたちが書いたものをそのまま印刷したが、とても嬉しそうだった。(B小2年)

(4) 未習の漢字を板書で書く

「班」「道德」など、未習の漢字も板書するようにしている。二度も書けば、もう読めるようになっている。
(A小2年)

板書で未習の漢字を書いても「習っていない。」という声が出なくなった。読めない漢字は「先生、どう読むん？」と聞き、なんとか読もうとする意識が感じられる。
(E小3年)

9 漢字指導改善研究の取組から見えてきたこと

(1) 上学年の漢字をルビ付きで表記することの有効性

「漢字音読名人」には、上学年の漢字も多数入っている。しかし、そのことに全く臆することなく、子どもたちは生き生きと取り組んでいる。むしろ、「習っていない漢字も覚えられる」と積極的に受け止める子どももいる。

こうした子どもの姿は、仮説①の有効性を実証するものと言える。

(2) 「漢字の読み優先」指導の有効性

「漢字の読み優先」指導は、研究協力校の全てで成果を上げている。とりわけ、学力の中・低位の子どもたちの学習意欲・漢字習得力に顕著な伸びが見られる。このことは、仮説②の有効性を実証するものと言える。

(3) 漢字が読めることで「自己肯定感」も高まる

漢字が読めないために学習全てに意欲を失っていた子どもたちが、漢字の読み優先学習により、自信を取り戻し、主体的に学ぼうとする姿勢になったという報告が各校からあった。通級指導教室での実践にあったように、対人関係までも改善してしまうことさえある。「漢字が読める。」という実感が自己肯定感を大いに高めたのだと言える。

9 今後の展望

(1) 漢字の意味理解を踏まえた漢字音読指導

「漢字の読み優先」の指導の有効性については確かな手応えを得る結果を得た。今後は、そこに「漢字の意味理解」の指導過程をどう組み込むかが追究課題である。「読み」と「意味」を確実に捉えることによって、漢字の習得はより確かなものになる。語彙力そのものが未熟な子どもたちにとって、とりわけそのことは重要である。

(2) 漢字の「読み」から「書き」への指導過程

今年度の取組は「漢字が読める」ことに焦点を当てた取組であった。その成果は一定得られた。また、「読みの習得」が、「漢字の書き」のベースになるということも、子どもたちの変容から一

定確かめられた。ただ、「読みから書きへ」の指導過程はあまり具体化されていない。今後の追求課題である。

(3) 組織的な取組へ

漢字の習得は、最も身近で確実な学力向上策である。学年・学校全体で取り組むことで、その成果は飛躍的に高まるだろうと期待される。今年度の実践成果を踏まえて、今後、学校単位での取組が進められることを切望する。

10 付記

オブザーバーとして研究に協力いただいた杉澤周一校長、井上知子氏のコメントは極めて示唆に富むものであり、ここに付記させていただく。

□杉澤周一校長

— [中間交流会コメント] —

- ◎「漢字音読名人」の教材としての価値
 - ・書くことに比べて読むことは、はるかに易しい。
 - ・「読み→書き」というこれまでと逆転した指導の手法については、本格的に検討すべきではないかと思う。「漢字音読名人で抵抗を取ることは有効である」ということの実証事例を集めたい。
- ◎「音声」から入ることの有効性
 - ・音読自体が弾みのある楽しい活動である。算数の「本読み計算」でも、子どもたちがとても弾んでやっている。音声から入ることの有効性があるのではないか。
- ◎「中間層」が向上したということの検証
 - ・漢字音読名人の取組で「中間層の伸びが著しい」ことであれば、非常に有効な取組であると言える。丁寧に検証したい。この学習で「関心」「意欲」が大いに触発されていることが子どもたちの姿からうかがえる。
- ◎短く・簡単に
 - 短時間で簡単にできる取組であるということを抜きにはできないだろう。

□井上知子氏

— [中間交流会コメント] —

①漢字指導の改善を提唱する原点にあるもの

○表音・表意文字を使っているのは日本だけ

世界のほとんどの国は表音文字を使っており、表意文字と表音文字を使っている国は日

本だけ。その文化を継承して行かざるを得ないし、そのメリットを活用すべきだと思う。

○小学校6年で大人の新聞を読めない日本の子どもたち

表音文字の国の子どもたちは、小学校6年生で大人の新聞が読める。綴りは発音記号だから読める。だから、その言葉の意味を知っていれば理解できる。しかし、日本の6年生は特別優秀な子でないと読めない。グローバル化する社会にあって、この差は非常に心配。

それでも日本の学力レベルが落ちないのは、学校・親のたいへんな努力の賜だし、それだけ子どもたちは意欲的なのだ。的確な方法を取ればもっと伸びるはずだと思えてならない。

○極端に自尊感情の低い日本の若者

世界的に見たとき、自己肯定感・自尊感情が極端に低いのが日本の青年層(中・高・大)である。なぜ低くなるかと言えば、学習に大変な負荷をかけ、その中で劣等感をものすごく育んでしまっているからだ。

○「文字が読める」ということの重要性

学校教育の目的の一つは、社会に出て仕事ができる人間に育てることだ。仕事をするというときに、書けなくても文字が読めれば仕事の内容は分かる。だから「読める」ということにもっとウエイトを置いて良いと思う。読めれば言葉を獲得できる。情報を獲得できる。だから、そこを助けてやれば、意欲が出てくるだろうし、劣等感もあまり感じないのではないか。

②私の子育ての経験から

私の長男は小学校に入学したとき、全くひらがなが習得できなかった。ノートにきれいに書いてはいたが、「文字」という認識が無く、全く読めなかった。

そのとき、『ひらがな』は単なる発音記号だから却って難しいのだ」と考えた。

そこで、「漢字をエピソード的にやれば覚えるかもしれない。」と思い、漢字の指導を始めることにした。車が大好きな子だったので、「車を運転するには免許を取る必要がある。そのためには新聞に書いてあるような文字を覚えないと取れないよ。」と言うと「字の練習をする。」と言ったので、それから毎日15分ずつやった。1日1文字、その漢字で遊び、意味を教え、文を作り、それを読む。確実に読めるようになったら、書くという形でやった。確実に読めるようになった漢字は、1～2回書く練習をすれば書けるようになった。そして、6年間ですべての教育漢字を習得した。弟の方も兄と同じようにやりたいと言うのでやった。弟は2年半ですべての教育漢字をマスターした。

★漢字の習得は「抽象言語」の習得でもある。

長男は、その後、大学で学ぶ楽しさに目覚め、卒業時には論理の整った精緻な文章文も書けるようになった。その経験から思うことは、「抽象言語」の獲得は重要だということ。

小学校3年生ぐらいで漢字が読めなかったら、抽象言語が取り入れられない。抽象言語が取り入れられないと抽象思考ができない。だから、高学年になるほど差が出てきてしまう。「国語ができないと数学ができない」というのは本当だろうと思う。そこから言って

も、漢字の習得は学力全体に大きく影響する。

③漢字指導の4つのポイント

◎最初に主体を起こせるか

「漢字を学びたい」という主体を起こせるか。

◎継続して主体を起こし続けられるか

◎エピソード記憶を活用する

エピソード記憶は長く記憶が保持される。また、1回で成立することが多い。漢字を教えるとき、このエピソード記憶を活用すれば非常に効率的になる。

提示する漢字は1回に1個にとどめた方がよい。特に低位の子にはいくつも提示すると混乱する。一日1漢字を提示し、漢字の意味を教え、その漢字を使って文作りなどを5分間楽しむという活動を入れてから読む練習に入るとエピソード記憶がうまく働くだろう。

◎子どもの発達過程を踏まえる「一対一」の関係が重要

生まれた時は母子一体の二者単一体。それが自他の区別がつき、一対一の関係が理解できるようになる。ここが不十分だと次の一対多の関係が築けない。

その次の段階が「多の中の一対一」の理解。集団の中において、先生の指示を自分に言われているものとして聞ける力。この感覚が育っていない子にいくら「話を聞きなさい。」と注意しても入らない。

さらに「多の中の一」の理解。集団の中で自分を保つ力。ここが弱い子は机の下にもぐったり友だちにちょっかいをかけて関心を引こうとする。

少なくとも小学校入学時には「一対一」の理解が必要。そこが十分でないと分かったら、それをどこかで入れる。教師がすべての子と一対一をやろうとするのは無理。でも、子ども同士をグループ化・二人組にすることで「一対一」が生まれる。

〔2学期末交流会コメント〕

○漢字の「意味を捉えさせること」がポイント

私自身は、漢字の「意味」から入り、「読み」をやって、読みが十分になってから「書き」という順序で教えた。漢字音読名人の場合は、「読み」から入り、少しずつ「意味」を捉えて、「書く」という方法になっている。

子どもへの定着ということから考えると、「読み」と「書き」の間で「意味」をきちんと伝えることが重要だ。「意味」を「読み」の前に入れたり、「読み」と「書き」の間に入れたりして、「意味」を入れるということをポイントにおくといいのではないか。

読みが入りにくい子の場合、「意味」を遊び的に教えていくことで「読み」に馴染んでいくということがある。

○総合的な学力の基本としての「漢字科」という捉え方

教師も親も「漢字の勉強は国語」と思っているが、漢字学習は、総合的な学力の基本として、独立したものとして捉えていいのではないか。漢字が習得できることで他の学力の下支えが必ず起きてくる。だから、漢字学習は教科の一つとして捉えた方が取り組みやすいのではないか。1日3分の短時間でもいい、確立した漢字学習の枠があり、それ以外に国語の時間や自習の時間が延長枠があるという考え方をしてもいいのではないか。

○子どもたちの主体性を引き出すこと

○先生は、ノルマを決める時に「ここまでならできるか？」と、子どもたちと相談して決められた。このプロセスがとても子どもに生きている。コンテンツ（決められたこと）の前にプロセスがある。このプロセスの中に必ず子どもたちとの応答性を入れる。それが子どもの主体性を引き出す。

プロセスを大切にするという意味では、T先生の「漢字ビンゴ」の取組もとてもいい。ビンゴ、くじ引きの中に「子どもたちの応答性」がきちんと入っている。ただ、国語の時間でやるというより、月ごとのお楽しみ会など、子どもたちの遊びタイムにやることで、むしろ漢字学習の定着が図れると思う。

○ペアで取り組む場合のポイント

ペアで取り組むとき、学力差のある子のペア、あるいは学力の無い子同士のペア等いろいろあるだろう。そのとき「助け合ってね。」と教師が伝えることが大事なのではないか。漢字音読名人の場合、できない子同士でもひらがなが読めれば助け合える。教師の言葉かけでかなり変わるのではないか。

— [3学期末交流会コメント] —

○漢字の習得は「推論」の力につながる

S先生の報告にあった、「漢字が読めるようになったら、分数が分かるようになった」という子どもの発言はそのとおりだろうと思う。抽象言語を理解すると推論の力がつく。この子は推論できる力を獲得したのだと言える。

元々漢字の獲得がすごく重要だと考える理由はそこにある。

3年生頃から漢字の意味が抽象的なものが増えてくる。漢字が読めない子は、抽象的な意味が取れない。抽象的な思考がとても弱くなってしまふ。漢字を習得させることは推論能力を付けていくことにもつながる。

中学校の数学では文字から記号になる。そこでつまずく子はかなり多いが、漢字を習得できている子はつまずきにくくなる。数学の世界では、推論の力は国語力が無いとできないと言われている。

○子どもの主体性

F先生は、「子どもの主体性」ということを実践の軸に置いておられる。他の先生方も、ファイリングやペアでの取組、辞書調べ等、子どもの主体性を引き出す「しかけ」を工夫

されている。子どもの主体性を引き出し続けることができれば必ず成果は上がるだろう。

○漢字の意味を押さえるために漢字ドリルの活用

漢字の学習で「意味」を押さえるために、漢字ドリルはとても有効だと思っている。

「漢字音読名人」で読みの先行学習を進め、漢字ドリルで一つひとつの漢字の意味を押さえる場をきちんと取れば、かなり補完されるのではないか。

前回も申し上げたが、漢字を国語科で捉えるのではなく、「単科」として毎日短時間、文作りを楽しんだりしながら、一年間定着させてしまうと、全ての科目に響いてくのではないか。

○その子なりの習得方式を見つけた子は強い

読み書きにハンディのあった自分の子が大学に入り、自分で編み出した学習方法は、新聞の記事を要約して書くというトレーニングだった。「とても時間がかかるが、確実に身につく。」と言って、やり続け、語学の学習にもそれを適用していた。

自分の学習方法を見つけた子は非常に強いと思っている。